

高橋和巳「現代日本知識人の課題」〔草稿・転写〕

田 中 寛（大東文化大学外国語学部）

A Transliteration of “Some Subjects of Modern Japanese Intellectuals” by Kazumi Takahashi

Hiroshi TANAKA

【解説】

高橋和巳（1931-1971）は作家、中国文学研究者。大江健三郎、三島由紀夫とともに一九六〇年代を代表する作家として、長篇『悲の器』でデビュー、その後『憂鬱なる党派』、『邪宗門』、『我が心は石にあらず』、『日本の悪霊』など、多くの長篇小説、評論著作を残した。師の吉川幸次郎氏の後継者として期待され、京都大学文学部助教教授に就任するも、おりからの学園闘争（全共闘運動）の渦中であって斃れ、三九歳の若さで病死した。『高橋和巳全集』全二〇巻（河出書房新社、1979-1981）がある。

本資料は「高橋和巳文庫特別資料（所蔵番号 T5091）」（日本近代文学館所蔵）にもとづき、手書き原稿を転写活字化した。読み進めていくうちに、かつて学生に向けて行われた夏目漱石の講演「私の個人主義」に連なる印象を抱かされた。高橋自身も恐らく漱石の「自己本位」を念頭において語ったことが窺われる。なお、高橋和巳は京都大学学部卒業後に大学院に進学しているが、文中に、落第、企業就職受験も体験したことなどのエピソードも綴られていて興味深い。これらの事蹟は従来の定稿年譜にも見られなかったものである。原稿用紙二九枚だが、数行に互る空白行もある。講演のために準備された草稿であることから文章、内容には相前後した箇所や中断的なメモがあり、また論旨に整合性が見られず、とびとびになっている箇所も散見される。にもかかわらず、ここには恐らく河出書房第一回文芸賞を受賞した直後（文中「最近幸運にめぐまれましたが」とある）の気分的高揚がみられ、構想されつつあった「葛藤的人間の哲学」、「耐える思想」の片鱗が垣間見られる。

高橋和巳は立命館大学文学部講師の時代に、『立命館学園新聞』に次のようなエッセイを寄せている（括弧内は発行年月日）。

- 「陶淵明について」（一九六一・一一・一一）
- 「寡きを思えず、均しからざるを思う」（一九六二・一・一三）
- 「バベルの塔」（一九六二・六・一）
- 「ある日、ある時―二日酔いで原稿を書く―」（一九六二・一〇・一一）
- 「同人誌の愉しさ（学生時代）」（一九六二・一〇・一三）
- 「新しい思想をつくる人は正直」（一九六二・一一・一一）
- 「人間に政治をみる文学」梅原猛他との対談（一九六二・一一・一一）
- 「再び戦争とは何であるか」（一九六四・一二・八）

以後は数年を置いて末川賞小説部門選評が続くが、一九六二年（昭和三七年）に集中して書いていることがわかる。

なお、本講演がいつ開催されたか、本文中にある主催者側の立命館大学新聞社に問い合わせしてみたが、記録がないとのこと回答であった。また、高橋和巳の主筆した「対話」第二次同人の一人であった太田代志朗氏によれば当時確かに講演会が開催された記憶があるものの、そのスクラップブックが見つからない、とのご報告であった（立命館大学文学部講師橋本正志氏の調査でも同様であった）。

いわば幻の講演といえようが、ここには明らかに高橋和巳の知識人論の原型があり、生涯にわたる失明の階層、知識人問題のテーマにつながる思想的出发点であった。最後に発せられた「大学ではこの耐える思想というものは教えてくれません。各自がそれぞれの経験を通して奥歯でものを噛みしめるようにして学ばねばならないものです」という思いこそ、彼が若い世代に捧げるメッセージであった。

掲載に当たっては、明らかに誤字、反復と思われる箇所は修正をほどこしたが、できるだけ原文を尊重した。判読不可能な箇所などは（ママ）とした。なお、高橋和巳の「現代知識人」について言及した記録として、座談会「現代知識人の役割」がある。毎日新聞一九六八年三月一三、一四、一五、一六、一八、一九、二一日の七回にわたって掲載された。座談者はいいだもも、江藤淳、永井陽之助（『高橋和巳全集』第一八巻所収）。ただし、本草稿とは直接の関連はみられない。本稿は「高橋和巳未発表・全集及び既刊本未収録草稿」の一部として、高橋和巳の本格的な研究書、太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編『高橋和巳の文学と思想 その〈志〉と〈憂愁〉の彼方へ』（コールサック社、二〇一八・一〇）に収録を予定していたものだが、諸事情によりここに発表することとなった。公開掲載にあたっては、日本近代文学館のご厚意に感謝申し上げる。

「現代日本知識人の課題」〔草稿・転写〕

〔注…メモ書き風に七行〕

知識人の分類

マンハイム^{注(1)}

① インテリゲンチヤ

② プロフェツシヨナル

③ インテレクテウアル

テオドルガイガー^{注(2)}

中国、読書人、君子—小人

君子は器ならず、儒家の言葉はインテレクチュアルであることを尊重することを示す。尤もこれは先秦時代（古代）の理想であつて、漢代には既に国家目的に沿うべく、その性格はプロフェツシヨナルなものに限定された。また、分類については、後漢の王充^{注(3)}の「論衡」^{注(4)}という哲学書にその試みがみられます。

通儒 文化継承的インテリ

鴻儒 創造的インテリ

小儒 即体制的インテリ等々^{注(5)}

しかし今私はこうした分類の概念規定に関して何かをつけ加えようという気はもっておりません。むしろ、ごく普通のイメージ、綜合雑誌にも書いたり、教壇に立ったり、企業の相談を担当したり、宗教活動をしたり組合活動を指導したりする、一群の身近な人々のイメージから出発し、そして、そうした一般的な広い意味での知識人のいわば予備軍である大学生諸君のあり方の相関を、具体的に話してみたいと思うのであります。知識人の性格規定は、その話の途中で必要に応じてやってゆけば充分でしょうから。

知識人の問題や課題が知識人自身の内面の問題として最も熾烈に、且つ普遍的におおいかぶさってくるのは、まず、知識人予備軍である人々が、
 実際社会に一歩足をふみ入れて、知識人となろうとする期間であります。——知識人の意味が外がわから問われる様々の場合、たとえば、社会の
 対立が激化したり、文明や文化が混乱したりした場合に、知識人が自己と対面してその道を選択し態度決定することも、——実は、この、知識人
 予備軍が知識人たるべく歩み出る期間と遭遇する様々の悩みのあり方の中に雛型として含まれるといつてよいと思われまふ。
 そうなのです。問題は甚だ具体的に我々の目の前にあるわけだ。

学園というところは、謂わば理念の鍛錬場であり、人々はそこで、多くは机上の読書を通じて、何らかの知識、思考能力、態度、理想を学び、
 そして「学内の試し得る」(ママ)扶助等で模擬的にためし、表現し、角逐してみることができ。しかし、ここでは、たとえ学生間で思想的、趣
 味的等々の対立が起こったとしても、学生相互、ならびに教師との間には本来、経済的な利害関係はない——だが、授業料を値上げして教師の日
 給を増額したりする場合はちよつと対立的になることもありすがね——しかし、まず、直接的利害対立者というものは実際はいない。それが学
 校がいわゆる社会なるものと体質的に異なるゆえんであり、年数的に諸君が若いということだけでなく、予備軍あるいは卵を旨ざす理由もそこ
 ある。

それ故また、学園で身につけた知識は、それが有効性を持つ以前に、一つの試練に直面する。そして、そこで角逐し葛藤し、あるいは変容を迫
 られ、あるいは部分的に捨てたりする。数年の後、なお生き残り、その生き残った観念を中心に体験を通じて築き上げられた広義の知識、それが、
 いわゆる知識人の知識なるものである。

私事にわたりますが私の体験から、名前は申せませんが、ある友人のその大学卒業後のことをちよつとお話してみましよう。

私たちの大学時代は新制第一回であり、全学連も戦後第一期全学連、先日、この立命館大学に講演に来ていただいた方で武井昭夫さん^{注(6)}などが
 東京で頑張っていました。私および私たち京都では、伝統的気風として、様々な学問の修練場においても東京とは一種対立的なところがあり、ま
 た私自身、さまざまな文化運動や政治的活動の中央集権主義とは反対の立場をとる一種アナキスライクな傾向があつて、直接交流はしませんが
 したが、全体としては戦後の飢餓状態からようやく解放され、また占領軍の政策が、学制改革をはじめると、全体として、改革の方に向つて(マ
 マ)いたこともあり、更に、戦争と(ママ)に圧迫されており、生活も様々の桎梏が一举にはずされたことの、鬱勃として自由の気風がありました。
 そして、先輩たちから受けつぐといった型ではなく、全く自分たちの自発的意志で、色々な学内活動がきのこのように芽をふいた一時期でありま
 した。

その気風はいかなながら朝鮮戦争を境「い」に再びある暗さの漂う気配と変移しましたが、——その僅かな自由放任の時代に青春期をもちえた
 ことを私は甚だ幸福に思っています。

ある人間があることを考えついで、その考えを叫ぶ、共感するものが、初対面で握手をもとめてくる。そして、数日のうちに一つの新しい集団が形成されるといった時代でした。

私たちはその報いとして、ある文学集団を形成し、学内の一隅に陣取りました。雑誌を出すことの外にも、考えてみて、よくやれたなと我ながら多少感心するような広範な文化的政治的な活動をしました。ところで、私たちの集団のボックスのお隣りに、共産党細胞のボックスがあり^{注1)}、自然、互いに、文学的認識や政治的態度を伝授しあい、また半ば対立的な、しかし、友人としては親しい交流が生ずるようになりました、その間の事情は、あまり詳しく喋っていませんと、友人たちに迷惑がかりますので申せませんが、——いまお話ししようとするのは、そのお隣の部屋にいた、つまりは学生の政治活動家であった共産党員——かりにA君としておきます。そのA君のことです。

私たち文学集団の人々も、お隣の人々も大挙して落第したのでありますが、うろろろしていたために、入学の時期には甚だ自由だった社会全体が、あるレッドパージをはじめとする方向転換を迫られた時期に、卒業の時期が重なってしまったのであります。

大変な就職難でありました。文化系(ママ)でありますので私たちも彼らの人並みにジャーナリズムやその他諸君も受けられるであろうような企業のところをくぐろうとしました。二〇〇人以上という率だったと記憶します。私たち、お隣の方とも前様で落第はしましたが、自信はありました。俺たちを採用せんような奴は阿保だと思っていたと思います。そこでも残念ながら私たちは大挙しておとされました。それが筆記試験でオトされるのなら、あきらめもつきます。一次二次と通っていった、最後の身体検査という名目だろうか、身許調査でおとされるのであります。あとである筋から、その身許調査書をみせてもらう機会があり、愕然としました。私自身、そしてA君も——A君がすでに忘れていたような手柄まがが詳細に書かれてあったのであります。

例えばA君ですと、…何月何日、京都労働会館における共産党大会に出席、何月何日、党内分裂により除名、何月何日、橋下の遊廊に出る、といった調子であります。彼は息せき切って、私の下宿に駆けつけて来て申しました。「こらあかん、いくらうけてもナンセンスだ……」

私事にわたりますが、私など傑作でありまして、受験したある新聞社から、願書その他一切をどさりと送り返してきました。ところが、下宿のおばさんが、新聞社から重い書類がきたというので、私がつきりパスしたものと錯覚して、その日の夕食には赤飯をたき、お酒を二合つけてくれたのであります。下宿のおばさんは申しました。ご両親が苦勞してあなたを大学にやった甲斐がありました。これからはどうぞ両親にご恩返しをなささい……全く何と応答してよいか絶望であります。話がますます脱線しますが、その下宿には美しい娘さんがおられます、どうも下宿のおばさんのつもりでは、私をその婿さんにしてもいいと思っていたらしい。何故さういうことが解ったのかと言いますと、四人下宿していた中で、他の三人が銭湯に行っているのに、私だけが、その家の風呂に入ることを何故か許されていたからであります。——そんなことはどうでもよろしいが、ところで、私が卒業して、早くも甘い社会に対する夢を喪失せねばならなくなってしまつて、すると下宿の公もまた私に対する甘い期待は

喪失せねばなりません。何故か？ 生活人の感覚でいえば、失業者は人間のガス（ママ）だからです。

ここで私たちは体験として、知識人の性格というものを、否応なしに知らされました。

インテリは、資本をもたない。インテリは生産手段をもたない。彼にあるのは、ただ、一片の知識、一片の思考能力、そしておそらくは一切れの良心、それだけであります。早くも失業し、そして、その時はじめて、明日の糧に関係ある問題として、思想の問題を問題とせざるを得なくなりました。その不安戸惑いの中で、私をそのあり（ママ）、ありうべきインテリの姿を、言論ではなく、実際に、おのれ一人かみしめつつ歩む問題として背負ったのであります。それ以後の、友人たちの分裂と社会の中の処世こそ、現在の知識人のあり方の雛型でありました。

マルクス主義はこう説きます。

社会は生産手段を所有する階級と、それによって圧迫される階級の階級闘争によって成立している。資本主義社会では、それは資本家と労働者の対立として最も峻烈にあらわれる。ところで、インテリゲンチヤは、その存在のあり方としては、プロレタリアートと甚だしく近接する存在であるが、その意識は往々にしてプチブル的である。だが、インテリゲンチヤはいずれ、さくらねばならない。社会が二つの対立によって動く以上、どちらかに組「み」さねばならないのだということ。そして知識人の知識人たるゆえんは科学的洞察力のあることであり、自己の出身階級にはよらず、未来を担当する階級の視点から自己の処世を規定しうる点にあると。……

私たちは学生時代、知識として役立とうという考え方は知っておりました。お隣りの友人たちにとっては、知識の机上の指針であつたであります。しょう。ところで、その指針に皆したがつたでしょうか？ 少数の人々をのぞいて、そうはならなかつたのであります。

ある人はこう言いました。

社会に諸階級が存在し、その邪宗が対立していることは承認しよう。ところで、自分はむしろ、社会的には雑階級ないし階層に属している者ではない。ところで、プロレタリアートだけが、自らの利益を追究することによって、全人類の福祉を期し得るとするのは、ちよつとおかしいではないか？ なるほど、マルクスは労働者、農民、科学者と、ある位階をともなつて、議論することを忘れない。時には、好意的協賛者、中立者として、小生産者階級をもつて力を加えることがあるが、瞭らかに、マルクス主義は労働者を中心にすえるイデオロギーである。小資産階級が、自らの利益を自ら守り、そして自らの階級の理念的指導者をもつて何故いのか。あるいはまた、知識人が知識人自らの利益を独自に守ろうとして何故いのか？

理論的に整理しますと、こうした戸惑いは、その理論的根柢が薄弱にみえます。しかし人間は、理論の動物であると同時に感情の動物であり、しかも、感情はある形相性を有することによって、理性的理論が要求するのと同様の思想的位置を要求し得るものである。

いま、——詳しい統計資料も何ももつてはおりませんが、この教室にいる諸君の父兄の生業の分布は、どうでしょうか。多分、同志社とは対照

的な立命館大学の性格からしたって^{注(8)}、一番多いのは農村出身、農業及び農村、各地方における商売や手工業者が三分の一。いわゆる雑階級といわれる、公務員をはじめ月給取り(八百屋とか給食屋さん)の子弟が三分の位置。そして、少数の比較的裕福なほうに資産階級など社会の指導的位置にいるハイカラーの子弟、残りの三分の一足らずがおそらく、プロレタリアートの子弟ないしは自身プロレタリアートである人々だろうと思います。

ところで、私の経験では、プロレタリアートの子弟が直接プロレタリアートの要求する理念活動にそのまま抵抗なくのつてゆくという例はむしろ少ないのであって、或いは——模範的なものにせよ、社会の問題を自分の問題として学生時代に活動の準備をする人々は、概ねは、プチブルあるいは雑階級、そして農村の自作農の子弟がむしろ多いのであります。この会を主催している立命館新聞社あたりで一度統計をとってみられるとよろしい。多分そうなっております。

つまり、インテリゲンチヤは、自分の出身階層を裏切ろうとする性質を理論的に持つものであるらしい。親父が汲汲と努力して生活を築き、自分が受けられなかった高度な教育を子供に受けさせようとする。ところが、当の息子は、その親父の期待を裏切り、親父と面と向かって、あんたは阿保か?つてなことを言う。たとえば二三人の職人さんを使って家内工業をいとなんでいる父親に向かつて、いずれ零細企業などは大資本のふところに系列化されるか、さもなければ、プロレタリアート化される。親父よ、あんたの努力は、都会の大勢のうみ(ママ)で、非常に無駄なことだ、と言ったりする。

はなはだしい場合は、親父! あんたは、うちの職人さんを搾取しとるぞ、人民の敵だ!

そういう具合で、学生時代、親父とつかみ合いの喧嘩をした友人を私は知っている。お袋さんはいつも息子の味方をするものであって、息子の言うことはよう解らんけど、息子があんなに言うんだから、今度の選挙の時には息子が投票せよという人に入れたげましょうという具合である。

ところが、卒業の時期になっても、卒業証書をもって帰ってきよらん。どうしたのか? と思っていると、落第した、という。せつかく大学まで行ったんだからもう一年、学資を出してやるか、ということになる。そして一年たってみると、憂鬱な顔をして、万年失業者だ、てな調子で帰ってくる。息子は誇りが高くて、変な仕事はしたがらん。毎日毎日社会をほろくそに罵っているけれど、では息子はすばらしい考えでもあるかという、と、あまりない! ……

ところで私たちの友人がどうなっていたかという、——勿論皆生きてます。日本の社会というものは大変あたたかいところがあって、人間めつたに飢え死にはしません。

友人A君は、一度、父親の会社に尖鋭な組合を作って会社をつぶし、二度目は、あらたな会社を親父が起こし、それが苦境に立ったとき、今度はない覚えた如何なる手段によって、次々と工員のくびを切っていた。海千山千で何でも知つとるから、先々先々に立ちまわって、もの見

事に工員のくびを切ったのであります。最近会ったら、名刺には——会社工場長という肩書がついていました。でつぷりと肥えてましてね。友人A君の場合は極端です。しかし、ここで知識人が宿命的に背負う一つの性格は明らかである。それは、彼が身につけた知識はいかようにも用いることができるということである。対立する組織の、どちらに組みしてもインテリはその参謀的位置をしめることは出来るのであります。国家を維持するためにも国家を破壊する運動にも、ともに役に立つ。文化を豊饒にするためにも、文化を貧困にし画的にするためにも、ともにインテリの能力は有効性を發揮する。また、先年、北海道の製紙会社で大争議の起こった時、第一組合、第二組合がしのぎをけずりましたが、うわさに聞くところでは、どちらの組合のオルグも学生時代は一緒に机を並べていた人だということです。どちらも知識人の栄光と悲惨を、その同時に味わったに違いないのであります。

インテリゲンチヤはそれ自体、ひとつの矛盾体である。その矛盾の形態は各人各様である。そしてこうして矛盾が資本主義体制が他の体制に移行することにおいては恐らく消えないのであります。

今まで、私は政治的知識人に焦点をあてましたが、文化的知識人、あとはボヘミアンの知識人にも、また型を変えておおいかぶさってくる。たとえば、一人の文学青年を例にとりましょう。

学生時代、彼は自己の能力を無限大に信頼し、日本の文学のもっている鞘の狭さを吾こそは矯正せん。李白というならば大雅久しく起こらず、我々為さざれば誰が為さんや、と思っている。だが、彼の主張がつかぬられるためには、(丁度、企業内の組合活動をしようとするよりは、まず企業側の側をくぐらねばならぬように)彼の書いたものが相当に広く人々の目にふれねばならない。現在のジャーナリズムには必ずしも信頼しがたいと純心な文学青年は、この文学的立場の相違を超えて感ずる。彼は一度二度、大量伝達以外の伝達手段を考え、それを実行してみる。ところが、そういう運動はまず十中八九失敗する。この点に関しては、友人ではなく私自身のくやしい体験として相当に自信をもって言うことができる。

文化の中央集権はけしからんと思う、彼の住む地域の団結をはかる。そして雑誌を出す。ところが、ああ、わが同志の書いているものは全部中央に向って媚びを売っているではないか。

えい糞！ 乾坤一擲、大長篇小説の新人叢書でも企画してやれと思う。ところが配給組織というのがあり、「大阪屋」^{註⑨}の人々ががんばれと上げましてくれても、「大阪屋」だけでは本は関西の主要都市にしか廻らない。やはり東販、日販を通さなければダメである。東京に行って東販、日販に盲蛇おじず交渉する。大資本のいる組織が、千部ばかりのあまり売れそうにない本を扱う気などもっていない。著者は無名、出版屋も無名。——われがなり(ママ)、誰かのコネで談じ込む。ああ、彼の理想はどこへ行ったのか。理性ではなくコネの力でやっこさ、配給だけにしてもらう。しかし莫大な金を必要とする広告などだせないから、結局は友人たちを総動員して、人の慈悲にすがって本を買ってもらおう。かくて企画は失敗、残るのは借金と、あいつむらかった(ママ)有り難くない名譽だけである。

かくてお隣りの政治集団が大崩壊をしたすえに私たちの文学集団も、卒業後いくばくとなくして大崩壊したのであります。

その後どうなったか。一番多いのが、完全諦念派——十年足らずのうちに、まともな文学書すら読まなくなって行く人々。

第二は、既存社会の派閥や、ある種のからくいへ(ママ)の自責派——東京いつていうて、しかし彼らは、辛うじてテレビライターや抄訳の下請けをするものをのぞき、もみくちやになって帰って来る。

第三は、やけのやんぱち、*It's or nothing*派、一生に一発大長篇を書くから、おれが死んだら、誰か偉くなった奴よ、出版を頼むぞ。——最近幸運にめぐまれましたが^{注脚}、態度としては、私はこの、ヤケノヤンパチ派であります。

ところで、そろそろ結論を出さねばならぬ時間となりました。

社会は、先人たちが解決しなかつた問題が次の世代にかかる「重荷」となつて継続する。私たちが現在、政治というものからめ、権謀術策を本能的に嫌う文学者までが何等かの形で政治的思弁をもなさねばならぬ所以は、人類の全体の長い年月の努力にも拘らず、政治に関して、多くの先人たちがあまり多くの問題を解決しておいてくれなかつたからであります。科学の面では、人類は素晴らしい展開をとげました。一つ一つ問題は解決されている。科学にたずさわるプロフェッショナルな知識人はその点幸福である。彼らは、彼ら自身の興味をつらぬくことが人類の進歩に瞭らかに役立つという確信をもつことができる。文学も本来、人間の陥穽の陶醉と、活動の幅を広げ、更に物理的時間としては限定されている人生を、より懸命に豊富なものとしてすごし、美的なそして非常に重い任務を背負っている。にも拘わらず、人類の發展史上、非常におくれをとつて政治やセックスを相変わらず問題にせねばならぬとははなはだ不公平である。専門化と分業化は避けられぬ以上、政治のことは政治家にまかせておいてよいように早くなつてほしい。

しかし、恐らく当分はならないだろうし、また文学はその永遠志向を同時にもち、時代預言性ゆえに損な役割を即ち受けねばならない、そう思います。私自身文学をやるゆえに、どうしても文学に就いて話すことになりましたが、では、知識人の一員として如何なる態度をとるのがよいと云い、知識人予備軍に対して、どうやるというのが最も良心的なのか？

私は知識人には知識人独自の任務、独自の態度がありうると考えます。それは、種々知識人が、一種の浮動階層であるということの不安定性とでまかして(ママ)知識人に賦与される一つの性質であります。今まで否定的な側面として語つて来ました属性こそが、それに耐え抜くときに、実は一つの栄光となるということがあります。

第一に、彼は彼自身の資本をもたず、生産手段をもたず、ひたすら自己の内的な力にたよらなければならない性質。

第二に、どちらにでも組みせるといふ性質。

第三に、自己を育てて産むものから自由でありうるといふ性質。

さらに直接的な組織性も未だもたず、本来孤独であるという、その性質であります。

人間が真に自律的存在でありうるかどうか人間が真に草々(ママ)的存在でありうるかどうか、そして人間が、利害を超える友愛による結合を實現しうるかどうか、——世界に先立って知識人が問われているのだと考えていただきたい。

埴谷雄高という作家が云っております。はるかな未来においては、万人が知識人となるはずのものである。——
そして今一つ、現代の矛盾を、内面化した矛盾として自己のうちにもつことを意味する。

歴史を短か目に区切れば、あたかも附帶的階層にみえる知識人は、歴史を客観的にみる時、人類特有の到達すべき状態の先取の実験者としての意味をおびてくるはずである。

彼らの内在化した矛盾、彼らを——葛藤的人間にするであろう、彼はどうしても葛藤している存在である。その葛藤は内在化されたものであるゆえに、現実に取り得る偶然や利害のための、——などに支配されぬ解決を誰かがどこかに見出す可能性がある。

私たちの未来は司祭や言託者や専制者は、いりませぬ。そうだ、人類の数だけの葛藤者がいること、存在の意義を問い続ける葛藤者だけで十分なのである。

命令するものと命令されるものとの図式を直ちに根底からつきくずすことの出来ずすのは、かかる人々である以外にはありようはないからです。尤も、こうは云つても、あまり慰めにならぬかもしれません。

現実の問題として、最初に述べました、種類の知識人の王充、そのそれぞれに属する人には相互に侮蔑し合うことをやめるだけでも前進であります。……人類のままの姿の雛型を体現しつつあるという了承さえあればそうした相互侮蔑はなくなるはずで、たとえば、たった一冊の辞書を作るために懸命に努力し得ている人を、決して社会運動家は侮蔑してはなりません。また幅広い教養人も、彼が鍵的(ママ)であるゆえに、軽蔑してもならんです。何故なら、現在の緊急の課題ではないにせよ、それは未来の課題を任っている人びとだからです。

私たちが普通思想の名で読んでいるものに三つの思想があります。

変革の思想、体制維持(秩序)の思想、そして耐える思想。戦後文学における武田泰淳、あるいは中国の思想^註 ……略 ……

大学ではこの耐える思想というものは教えてくれません。各自がそれぞれの経験を通して奥歯でものを噛みしめるようにして学ばねばならないものです。

大学を出て特権者に感じさせられる一つの事柄は、大学の中で自由の理であったりと、なぜか全然通用せん、ということである。社会は残念ながら、理念になつては動いておりません。

…… 以下、中絶

註

- (1)マンハイム Karl Mannheim (1893-1947) ハンガリー生まれの社会学者。知識社会学の確立者、現代学の構想者として位置づけられる。ナチス政権後、英国に亡命、ロンドン大学で終生教鞭をとった。著書『イデオロギーとユートピア』など。なお、この三種類の知識人は論語の「君子は器ならず」とともに、「現代文学の課題」(『文学講座』所収、『高橋和巳全集』第二十卷、一九八〇年、河出書房新社)でも言及されている。
- (2)テオドルガイガー Theodor Geiger (1891-1952) ドイツの社会学者。
- (3)王充(おうじゅう 27-97) 中国、後漢の思想家。字名は仲任(ちゅうじん)。浙江省の人。世の虚妄を憎み、所説の真偽をただした「論衡」三〇巻がある。遊侠の家柄で怨仇を逃れ、上虞に住む。幼児から礼教的教養を身につけ後に上京し、班彪(『漢書』の著者班固の父)に師事、十数年のち帰郷。地方官吏となるが上司と意見が合わず、進退を繰り返した。章帝の晩年、友人謝夷吾の推挙により召徴されるが、中央での状況の変化により断念。「養生の書」を著わし、不遇の中に生を終えた。桓譚の批評精神を継承し時弊を指弾したが、その生成、運命、無鬼の論は魏晋の思想や唐宋の思想に影響を与えた。(大久保隆郎『日本大百科全書』ニッポニカによる)
- (4)『論衡』(ろんこう) 中国、後漢の思想家王充の著書。三十年の歳月を費やし、三〇巻八五篇を著した。『隋書』経籍志はこの書を「雑家」に分類する。その内容は、不遇の生涯を繁榮してか、逢遇篇を冒頭に配し、仕官の遇・不遇は才能、行操と無関係であると説き、これを偶然によるものと解釈した。この偶然性は人為・有為を排する自然無為の「天道観とかわり、人間の運命、貴賤寿夭等々は生命を得ると同時に天の星宿からもたらされる気の厚薄、星の尊卑により決定するという独特な運命論を展開した。(出典、同右)
- (5)「通儒(碩学)」は「学問を広く深く学んだ学者、学問の道を極め尽くした大学者」。「鴻儒」は「偉大な学者、碩学鴻儒」。出典は賀賊『南史』。「小儒」は「愚かな儒学者、章句小儒。經典の語句、文字の逐一に拘泥し、書かれている一番大切なことを理解しない人」。出典は『漢書』「夏侯勝伝」。
- (6)武井昭夫(たけいあきお 1927-2010)。文芸評論家。全学連初代委員長。初期の『芸術運動の未来像』から『社会主義の危機は人類の危機——武井昭夫状況論集 1980-1993』、『改革』幻想との対決——武井昭夫状況論集 2001-2009』など多数。
- (7)「ある文学集団を形成し、学内の一隅に陣取りました。……」とあるが、この文学集団とは「京大作家集団」の看板を掲げた文学サークルで、当時一歳年上の小野信爾の属する歴史学研究会はこのボックスと隣合わせにあった。小野は「高橋和巳、小松左京らがたむろして侃々諤々の議論をしていた。高橋も小松も共産党員らしく見えたが、私は都会的なセンスの彼等とはやや肌合いの違いを覚え、何よりこんなところで共産党に入っはとても勉強できない、と思った」と回想している(『京大生小野信爾』、宇野田尚哉他編、京都大学学術出版会、二〇一八年)。なお、同書には小野が一九五二年の破壊活動防止法反対運動においてストライキ指導者だった学生に対して大学が行った処分に抗議して高橋和巳ら

が行ったハンガーストライキに際し、教授会側との交渉にあたったことなども綴られており、当時の学生をとりまく東アジア現代史の時代の空気を伝える貴重な一次資料となっている。小野は中国近代史研究を専門とし、のちに花園大学名誉教授となる。なお、「京大作家集団」については三浦浩『記憶の中の青春 小説・京大作家集団』（朝日新聞社、一九九三年）も参照。

(8) 当時は同志社大学学生は裕福な階層社会、立命館大学学生は庶民階層社会出身との評価が一般社会、学生間の認識であった。

(9) 株式会社大阪屋は、大阪府東大阪市の本社をおく、出版取次の企業。一九四九年九月に設立。出版取次としては日本出版販売（日版）、トーハンにつぐ西日本最大規模。二〇一六年四月に「株式会社大阪屋栗田」設立に伴い、大阪屋は解散した。（ウィキペディアによる）

(10) 高橋和巳が「悲の器」で河出書房第一回「文藝賞」受賞したことを指すと思われる。

(11) 武田泰淳の「耐える思想」については、「忍耐の思想——武田泰淳論」がある。『孤立無援の思想』（河出書房新社、一九六六年）所収。

参考文献

吉川幸次郎・埴谷雄高編『高橋和巳全集』河出書房新社 一九七九年～一九八一年

三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫 一九八六年

『高橋和巳 世界とたたかった文学』河出書房新社 二〇一七年

太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編『高橋和巳の文学と思想 その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コールサック社 二〇一八年